嵯峨野明月記

辻邦生

中公文庫

中公文庫 ©1990
嵯峨野明月記
一九九〇年七月二五日印刷
一九九〇年八月一〇日発行
著者 辻 邦生
発行者 嶋中鵬二
整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201737-8
Printed in Japan

中公文庫

嵯峨野明月記

辻　邦生著

中央公論社

目次

第一部　7
第二部　195
解説　菅野昭正　433

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

嵯峨野明月記

古川久先生に

第一部

一　闇の中より三人の声つぶやきはじめる事

一の声　私はもうすでに十分生きながらえてきたように思う。いまは残る歳月をお前たちのために役立てたいと思うばかりだ。私にはかつてのような体力もなく、お前たちや職人一統を率いてゆく気力もない。私がここを経営してすでに二十年。はじめて家の土台が置かれた日、村の入口に植えた松と梅が、いまでは見事な枝ぶりで私たちの往還を飾っている。この二十年のあいだですら、私は家業に励み、多くの手すさびをたのしみ、お前たち一族が行く末ながく安泰に暮しうるだけの家屋敷も保ちえたように思う。家父より譲られたものに、それは何ほどの寄与もしなかったであろうが、しかし私らが我執を去り、家業を専一と心がけ、簡素清貧を旨とすれば、それだけでも心豊かに寛いだ生活が十分にできるはずである。だからいま私がお前らに残しうるものといっては、

ながい生涯のあいだに見聞したさまざまの物語、珍しい出来事、心ひかれる人物、移りかわる世のさまを、ありのままに語ってゆき、お前たちがそこから自らの思慮と行いの指針となるべきものを引きだしうるようにしてやることくらいである。だが私には幸いまだそれらを思いだすだけの気力がある。それを書く時間があるかどうかわからぬが、できることなら、ささやかな私の遺訓として、だが何ら訓戒を含まぬこの世の曇らぬ鏡として、それをお前たちのために書きとどめておきたいものだ。いずれそのうちに、そうした時間もでき、それに必要な気力も戻ってくるであろう。だからいまは、この夜の闇のなかで、眠られぬ時々を、過ぎさった諸々の事柄を思いおこすことで満足しよう。思えば、それは波瀾の多い時代であり、多くの武将たちが興っては滅びた。都は騒乱の巷になるかと思うと、数年ならずして平和な歓楽場と化した。しかし人々が戦乱を忘れるころになると、必ず騎馬武者が町角に姿をあらわし、不気味な隊列が影のように町すじから町すじへ移動していった。またそこに生きていた人間たちのなかには、語るだけの値打のある人々が大勢いた。ある人は若死したし、ある人は百歳の寿をまっとうした。ある人は戦乱で不幸をなめつづけたが、ある人は混乱の世に産を成し、身をおこした。そしてそのいずれの人もが、私に、語るに足る存在だと思わせるのである。だから私はこの眠られぬ夜々のあいだ、彼らについて徹底的に思いだそう。出来事の細部を鮮明に思いだそう。それがお前たちの役に立つからばかりではない。私はそうやってもう一度

自分の生涯を生きてみたいからである。

二の声　おれから何を求めようというのだ。無理だ、無理だよ。おれは何も持ってはおらぬ。おれにあるのは、ただ絵筆を握ることだけだ。それに、だいいち、おれにはまだまだやることが多すぎる。おれはあれもやり、これもやり、その次に控えているものをやり、こうしていくらでもやることが残っているのだ。なんだって？　年のことを考える？　そんなことは一度だってないな。おれはおれのやりたいようにやる。そうだ。お前たちが何を言おうと、そんなことはおれにはまるで無関係だ。お前たちが何を言おうと、おれはまるで何も感じないのだ。それほどにも、おれは、自分のやることが多くあり、その一つ一つを成しとげるのに精いっぱいなのだ。おれは、こうして夜の闇が深々とおれを包むのさえ、にがにがしく思えてならんのだ。これは年のせいもあるが、宵闇が這いよるようになると、おれの眼は少し霞むようになってきた。それに燈心のあかりでは、色の輝きが狂うのだ。昼のあの輝かしさは生れないのだ。だから、おれは夜がくると、その濃いねっとりした闇が、まるで肉体をそなえた何者かの化身のごとく、おれの手から絵筆をもぎとるような気がしてくるのだ。おれが、夜、こうしてまんじりともせず、床のうえにうずくまっているのを見たら、さぞかし手をうってよろこぶ奴らも多いことだろう。狩野一族にせよ、陰鬱な岩佐にせよ、まっさきに手をうつだろうこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とだけは受けあいだ。じじつ夜明けを悶々と待つ苦悩だけは、この年になっていやというほど味わわせられた。これは白状しなければなるまい。おれは夜明けが待ち遠しい。一番鶏の声をきいてから、どんなにながいこと、おれは窓の外の闇をみていることか。外は暗く、ひたすら暗く、どんな気違い鶏が誤って時を告げたのかと、おれは、その見知らぬどこかの鳥屋（とや）のなかの雄鶏に向っ腹さえたてるのだ。お前らはおれをわらうか。わらうならわらえ。所詮お前らには、こうした焦躁はわからぬのだ。こうした渇望には無縁なのだ。おれは狩野一族が何を言おうと構わぬ。岩佐の弟子どもや等伯の亜流が何をほざこうと、いっこうに痛痒を感じない。お前らのように、他人の言葉にびくびくし、土佐が何と評したか、雲谷が何と讃めたかと、ただそれだけを目あてに絵をかいているのとはわけが違う。おれは夜がにくい。この暗さが呪わしい。そうなのだ。この暗闇がおれから色彩をうばっているゆえに、ただそのゆえにのみ、おれは自分の心のなかで、ぶつぶつと絶え間なく喋りつづける言葉に耳をかたむけようというのだ。おれはお前のように女々しく自分と対話するなどという趣味はもたぬ。しかも自分に阿諛し迎合するためにだけ自分と喋りつづけようなどとは毛頭思わぬ。そうだ、おれは闇のなかで、絵をかくかわりに、喋りつづけるのだ。それはおれの憤怒の声であり、焦躁の叫びであり、激情のつぶやきなのだ。わかった。やめてくれ、やめてくれ。もうお前たちのお為ごかしは沢山なのだ。お前たちに慰めてもらうくらいなら、鷹（たか）ヶ峰（みね）の鴉にでも阿呆呼ばわり

されたほうがましだ。

三の声　あれは波の音だろうか。いや、波の音ではない。竹叢（たかむら）を鳴らして過ぎる風の音ではないか。それにしてもまるで波のように鳴っている風だ。どこか呂宋（ルソン）か天川（マカオ）の岸辺を洗っている南国の碧い波のように、ながく汀に崩れながら、遠くまで音をひびかせてゆく。そうだ。まるでわたしの心を青い南国の海へ誘うように、白い波を砕いて、その音はごうごうと鳴りつづける。わたしの心に呼びおこされるこの痛みに似た思いは悔恨であろうか。遠い国への憧れであろうか。それともやがて終りを迎える自分の生涯に対する憐憫であろうか。わたしもその決心さえつけば、潮風に肌をやくこともできたのだ。帆に鳴る風音を終日聞くことができたのだ。角倉船（すみのくらぶね）が堺を出帆するたびに、船頭の弥平次が来て言ったものだ。「与一さま。呂宋にお渡りになれるのも、お父さまが御存命のうちですよ。ポルトガルやエスパニアの紅毛碧眼がいるばかりではありません。唐人、東京（トンキン）人、安南人、広東人、シャム人など珍奇な風俗、風習もごらんになれますよ。それに羅紗、鹿皮、鬱金、象牙、白糸、水牛角、蜜蠟、麝香猫、珊瑚など、呂宋、天川、安南の港の倉庫をみたしているさまをごらんになったら、こんな小さな国内で、やれ豊臣だ徳川だと騒いでいることが、それはばかげて見えるようになりますよ。与一さま、どうですか。一度だけお出かけなさいませんか」弥平次は顔をみるたびにそう言った。

しかしわたしはその言葉を聞くと、かならず自分がやりかけた仕事を口実にして、いずれいつか、一切が片づいたら出かけよう、と答えたものだった。しかしただ一度、わたしは父に安南ゆきを相談したことがあった。わたしは安南の風物も見たかったが、帰途、広東か江州に廻って、祖父が話してくれた大明国の生活、風俗を知り、達徳録に加える明朝詩文の諸書を渉猟したくもあったのだ。しかしなぜかそのときは父はわたしに安南ゆきをやめるように言った。その言葉はきわめて厳しく、わたしが重ねて希望をのべることはできないほどだった。しかし思えばそのときわたしが安南にむかって船にのったならば、二度と生きて帰れなかったかもしれない。そうなのだ。その年の角倉船は二月はじめに長崎を出帆、五月中旬に乂安（がいあん）に到着し、交易をおわって、六月中旬に帰途についたが、丹涯海門で突然暴風雨に襲われたのだった。生き残った船員たちの話からすると、弥平次は最後まで船から離れなかったという。彼は自分の身体を角倉船の主帆柱にしばりつけて、波と雨にうたれながら、人々が舟板を持って船から離れるよう叫んでいたというのだ。「おれは船と生死をともにしてきたのだ。いまさら、こいつを見すてるわけにはゆかぬ」弥平次はそう叫んでいたのだ。あのとき死んだのは弥平次以下十三人だった。あとの百十数名は弥平次の指揮もよかったためか、ともかく無事、安南国の役人に救助された。だが、もしそこにわたしが乗りくんでいたら、むろんわたしも弥平次と行をともにしていただろうと思う。それを父は鋭い予感のようなもので察知したので

あろうか。父は平生はむしろ仕事に率先して挺身することを好み、たとえば天龍川開疏工事のときなどは溢れだす激流を防ぐ土嚢を、人夫にまじって、自分も担いだし、堤防をこえてくる水に全身ずぶ濡れになったりしたものだ。しかも家業の土倉の業務も日夜心身をすりへらさずにおかないのに、父は土木事業の工事先でも、京都から送られてくる分厚い仕訳帳を、暗い燈心のしたで、克明に読みふけっていたのだ。たしかに父のこうした姿が、幼いころから、わたしの重い負担になっていたことは認める。とくに、わたしが部屋に閉じこもり、経書、史書を渉猟し物語本などに読みふけるようになって、書画に離れがたい執着をおぼえるようになると、そうした静かな落着いた刻々の時のうつりが、なぜか堰堤を築き、また船の帆を順風にむかってあげている祖父や父の姿を裏切っているように思えたのだ。明るい障子にうつる紅梅の枝のかげを、経史に読みつかれた眼で眺めたとき（それは鮮明な木活字版になる紺表紙の孔子家語中の一冊だった）、わたしは不思議な焦躁を覚えたのだった。わたしは堰堤を築く人夫の群れや海原へ帆を高々と張ってのりだす船を自分の前から消しさろうとつとめた。土倉ごとに重ねられた厖大な仕訳帳を自分と無関係のものと見なそうとした。そしてただひたすら簡明清爽たる古書や優美纖麗な歌巻の世界に生きるのが自分の使命なのだ、自分の本当の生き方なのだと思いこもうとした。だが、そのたびに、深く、心の奥のほうで、黒ずんだ不安が、金色の眼を光らす蛇のように、じっととぐろを巻いているのに気がつくのだった。わた

しは一度そんな不安や後ろめたさを感じだすと、もうじっと机の前に坐って、静かに移動してゆく障子のうえの梅のかげを見ていることができなくなった。といって、机の前を離れたわたしは、その足ですぐ大堰川開鑿工事へ駆けてゆくわけでもなく、また新しい廻船計画を考えるというわけでもなかった。せめて嵯峨野の奥に涯知らずつづく竹やぶのなかを、あてもなく幾刻も歩きまわるほかなかったのだ。その後、なるほどわたしは自分なりに、父に恥ずかしくないだけの仕事を手がけてきた。治水事業もやった。廻船もやった。鉱山開発も手がけた。だが、結局最後には、わたしは書斎のなかに引きこもってしまった。どうにもならぬこの病気のせいだといえばそれまでだが、それ以上に、わたしは死ぬ前に自分の好きなことを思うだけやりたいという気持があったのだ。それはわたしには二度とめぐりこないこの世にあることへの、どうしようもない切実な憧れから、つきうごかされた行動だったと思う。そこには、これっぽっちの嘘も見栄もなかったのだ。にもかかわらず自分のこうした生涯の煮えきれなさ、最終的な撤退は、わたしには、なぜか、もっと重要な（現在のわたしにさえまだ理解できぬ、もっと深遠な、根源的な）なにものかに対する裏切りであるような気がしてならない。ことに、いまのように、風がざわざわと騒ぎたって、心を遠い南国の青い海にさそうようなとき、わたしのなかを鋭い痛みとなって過ぎる悔恨の響きを、なぜかわたしは打ち消すことができないのだ。いったい、わたしの生涯は、本来自分があるべく定められたものへの裏切り

だったのであろうか。わたしは自らの柔弱な趣味と嗜好に逃避して、義務として与えられたものを見て見ぬふりをしつづけたのであろうか。それともわたしはあるべきように生き、あくまでも自分に即して生きてきたのであろうか。風はいっこうに弱まろうとはせず、夜明けは遠い。だが夜が明けてもわたしの眼はもはや光をみることはできないのだ。何という暗さだろう。この暗さのなかでわたしの生命は、燭台の炎と同じく、間もなく燃えつきよう。そのあとにくる大きな深い闇――それをわたしは耐えねばならぬ。せめてその死の闇がわたしを包むまでに、果してわたしは自分にふさわしい生を生きたのかどうかを、もう一度よく検討しなければならない。それがこの盲目の男が朝を待つためになす最後のつとめでなければならないのだ。

二　草花鳥虫を愛(め)ずる事、家業に及ぶ条々

一の声　お前たちも知っているように、私は刀剣の鑑定(めきき)、磨礪(みがき)、浄拭(ぬぐい)という代々の家職のなかで、家訓をひたすら畏れ謹んで生きてきた人間だ。私はそこから外へ出ようと思ったこともなければ、家職に倦んで、他人の仕事がうらやましいと感じたこともない。なぜなら、私はごく早いころから、家職のなかに生きることが、すなわち人間として正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com